様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　5 月　30 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005-2008
課題番号：17520377
研究課題名（和文）　英語冠詞習得と情報構造

研究課題名（英文）　Acquisition of English Articles and Information Structure

研究代表者 田中　順子(TANAKA JUNKO)
神戸大学・大学院国際文化学研究科・准教授
研究者番号：90335406

研究成果の概要：本研究は、英語冠詞を日本語母語話者が習得する際に困難となる要因について、実証的に検討したものである。具体的には、発話の状況を動画あるいは文章で提示して、英語を話したり、書いたりして産出した。書き言葉データ(1699 例)の分析を行った結果、各冠詞の産出頻度は *the*（747 例）、*a*（658 例）、φ（294 例）の順であり、正答率はφ（89.80%）、*a*（87.23%）、*the*（82.73%）の順であった。また *the* の誤用が多いことが目立った。一方、クローズドテストを使った実験においては、学習者が *the* と結びつけ易い特定性の有無が、冠詞を正しく使用するかどうかに関わっていることが分かった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	900,000	0	900,000
2006 年度	1,600,000	0	1,600,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,500,000	300,000	3,800,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育学
キーワード：第二言語習得論、冠詞、認知科学、英語、特定性、定性

１．研究開始当初の背景

母国語(L1)に冠詞が存在しない日本語話者にとって、第二言語(L2)としての英語の冠詞習得は困難である。L2 英語話者である日本人学習者が L1 英語話者が持つ冠詞用法の知識を内在化することは容易ではない。

英語冠詞の選択には、様々な要因が関わっている。具体的には、定性(definiteness)や同定性(identifiability)あるいは特定性(specificity)といった談話コンテキストに関わる要因のみならず、冠詞の後に続く名詞の属性といった言語的な要因が含まれる。母国語話者はこれらの要因の値を瞬時に計算して、φ、*a(n)*、*the* の選択を行っている。

このような冠詞を使用することは上級学習者になっても困難である。この困難さに関わる要因を探索し、将来的な教育への応用を見越した基礎研究を行うことが必要だと考え、本研究を提案した。

２．研究の目的

本研究の目的は、冠詞選択に関与する変数

（要因）を同定し、それらの変数への値の付与において、日本語を母国語とする英語学習者と英語母語話者との間にどのような差異があるのかを探索し、母語話者らしい冠詞使用に関与する複数の要因のうちどの要因が最も寄与している（関わっている）のかを、量的に分析を行って検討することである。

具体的な目的は以下のとおりである。

（１）学習者が冠詞の選択で困難を覚える原因について探索する。

（２）日本語学習者が冠詞を選択する際に困難を覚えるコンテキストで、日本語話者と英語母語話者が冠詞選択を行った場合、それぞれの反応がどのように異なるのか（あるいは一致するのか）を探索する。

（３）日本語を母語とする英語学習者の用法と英語母国語話者の用法との相違点のずれについて検討する。

（４）日本語を母語とする英語学習者が、関与する複数の要因のうち、どの要因において変数の設定を誤ったために英語母語話者とは異なる冠詞を選択したのかを量的に分析する。

（５）学習者のプロトコール分析の結果を基に、学習者の理解と実際の言語処理過程の間にずれがないかを検討する。

３．研究の方法

本研究は、コンピューターを使用して言語状況を与え、状況に基づいて学習者が伝達意図を持って英語で発話し、発話中に現れる冠詞使用を分析する方法を採択した。研究参加者は大人を対象とした。当初は研究参加者数を、英語ネイティブ話者で 20 名、日本語母語話者で 200 名程度とした。本研究の分析に使用したのは、英語ネイティブ話者 8 名分、日本語母語話者の英語学習者が 75 名分である。

２で述べた目的の（１）（２）（３）は実験１として、目的の（４）（５）は実験２として実施した。それぞれの実験では以下のような研究方法を採択した。

（１）実験１の研究方法

①研究参加者：日本語を母語とする大学生 42 名（女性 31 名、男性 11 名、平均年齢 20.0 歳）と、比較群である英語母語話者 8 名から成る。

②材料：Pear Film, 背景アンケート、事後アンケート。

③手続き：実験手法は田中(2006)の手続きを概ね踏襲した。参加者は、スピーキング(S)とライティング(W)という２つの異なる産出のモード（様相）で、同一のビデオクリップの内容についてナラティブ（物語）タスクを行う。最初に、参加者は参加趣旨説明書を読み、参加に同意をした上で動画 “Pear Film”(Chafe, 1980)をパソコン上で２回連続して視聴する（１回の再生時間約５分、合計約 10 分）。動画終了後、参加者に対して、どの様相（スピーキングあるいはライティング）で発話を行うのかについて説明が行われた。

様相（スピーキングかライティングか）を要因として加えたのは、様相が異なることで、アウトプットの際のプラニング時間（言語情報処理の時間）の長短が生まれ、これが冠詞使用の容易さ（あるいは困難さ）につながる要因になると考えたためである。

説明後、参加者は動画の内容について、スピーキングかライティングかどちらか指示された様相で物語を産出する。一つの様相で最初のタスクが終了すると、参加者は動画をもう１度視聴する。この動画視聴を終えると、参加者に対して第２番目のタスクの説明が実施される。そして、１番目のタスクとは異なる様相で第２タスクを行う。実験終了後、参加者は２つのアンケートに解答する

スピーキングによるデータは、IC レコーダーか、Audacity Portable 1.2.6 Revision 2 を用いてコンピューター上でデジタル録音された。ライティングによるデータは、以下の手順で収集された。まず、参加者は紙と筆記用具を用いて校正を行い、その後、自身のナラティブ原稿をコンピューターに打ち込んだ。実験は、小人数のグループか、個人単位で実施された。それぞれのタスクに終了時間制限はなかった。実験はすべての過程を終了させるのに 90 分程度を要した。上記説明からもわかるように、参加者の作文や発話はビデオに基づくという条件はあるものの、自由に創造したものであった。

④データ分析

冠詞は、まず Huebner の分類法(1979, 1985)に基づき、特定の事物を指しているかどうか、つまり “specific reference” の有無[±SR]と、聞き手にとって既知の事象かどうか、つまり “hearer’s knowledge” の有無[±HK]とからなる４種類の状況に分類された。

スピーキングにおいて産出されたデータは、書き起こしたのちに T-unit に分類された。書き起こしたデータから名詞句を抜粋し、名詞句はその役割によって、[±SR]と[±HK]の組み合わせからなる４種類の意味状況と、それ以外の９種類の名詞句（A-I）の合計 13 種類に分類された。

⑤統計分析

13 種類（冠詞を伴う[±SR][+HK]４種類と、それ以外の名詞句 A から I の９種類）に分類されたすべての名詞句について、その出現度数を算出した。そして発話の様相別に分類し

た群（SW 群、WS 群）別に、またライティングとスピーキングの様相別に、４種類の冠詞の出現頻度を計測した。すべての統計的な検定には、SPSS を使って正確確率検定を行った。

両群のスピーキング、ライティングで産出した冠詞の正答、誤答の出現度数間に優位な差があるかどうかを、冠詞８種類についてフリードマン検定を用いて検討した。冠詞８種類とは、[-SR][+HK]状況下で現れるφ，*a*, *the*、[+SR][+HK]状況下で現れる *the*、[+SR][-HK]状況下で現れるφ，*a*、[-SR][-HK]状況下で現れるφ，*a*を指す。

この検定で、有意な差が認められた４つの比較に関して、具体的にどの２つのグループ間に有意差が存在するのかを明らかにするために、マン・ホイットニーの *U*検定とウィルコクスンの符号付順位検定を使って下位検定を行った。

比較群として、英語ネイティブ話者８名分のデータも上記と同様に分析した。なお、目的(2)と(3)については、英語母語話者の被験者数が８名と少なかったため、記述統計のみを行った（記述統計の結果は省略）。

（２）実験２の研究方法

実験２は実験１と次の二点において異なる。まず、実験１では[±SR]と[±HK]を冠詞使用の要因として取り上げたが、実験２では Ionin, Ko, & Wexler (2004)の意味状況の分類方法にならい［±HK]の代わりに［±definite]を採用した。また、自由発話ではなく談話状況に基づいて穴埋めをするクローズドテストを採用した。

①研究参加者

大学生 33 名（女性 26 名、男性７名、平均年齢 21.0 歳）である。

②材料

Ionin, Ko, Wexler (2004)の 40 項目の冠詞テストを使用した。これらの 40 項目をランダムに配置し、ウェブサーバーから問題を配信するウェブテストを作成した。

③手続き

参加者は自分のペースでウェブテストに回答した。所用時間の平均は 31 分であった。ウェブテストの前後に背景アンケートを実施した。

④データ分析

特定性[±speicific]と定性[±definite]の二つの要因に基づき、冠詞使用の状況を分類した。40 例のテスト項目は次のように細分化した。definiteness(2 分類)、specific reference(2 分類)、scope(5 分類)、speaker knowledge(3 分類)である。

⑤統計分析

上記④で述べた要因を組み合わせ、10 種類の意味状況に分類し、回答の記述統計分析を行った。

また[definite]の有無、[specificity]の有無、[speaker knowledge]の有無の３つのペアについて *t*-test を行った。

特に、Ionin ら(2004)が冠詞使用の困難点として指摘する［specific]と[definite]の極性が不一致の場合（たとえば[+specific]と[-definite]の組み合わせや、[-specific]と[+definite]の組み合わせの場合）に着目して分析を行った。

４．研究成果

（１）実験１

分析の結果、冠詞の出現状況が[-SR,+HK]のφ冠詞の正答（$\chi^2=10.67$, $p<.01$）、[-SR,+HK]の *the*の誤答（$\chi^2=10.86$, $p<.01$）、[+SR,-HK]の *a/an* の正答（$\chi^2=12.99$、$p<.00$）、[-SR,-HK]のφの正答（$\chi^2=11.33$, $p<.01$）という４つの場合において、様相（スピーキングかライティングか）の違いによって、それらの解答の出現頻度に有意な差が認められた。

a/an, *the*, φのそれぞれの冠詞について、４つの出現環境別([-SR][+HK]、[+SR][+HK]、[+SR][-HK]、[-SR][-HK]の別)の正答、誤答数については、福田・田中(2009)を参照されたい。

（２）実験２

①記述統計の結果

記述統計の結果から Ionin ら(2004)の仮説通り、[specific]と[definite]の極性が不一致の場合に、冠詞の誤用が起こり易いことが判明した。以下に記述統計結果の一部を示す（数値は各カテゴリー内での出現率を示す。無回答があったため、３つの出現率の合計が 100%にならないことがある。正用は下線で示す)。

以下の４つの状況下では誤用が多く現れている。

*a*の過剰使用が疑われる２つの状況。

[+def, +spec] no scope interaction
a(14.39), <u>*the*(68.94)</u>, φ(11.36)

[+def, -spec] narrow scope
a(34.85), <u>*the*(52.27)</u>, φ(9.85)

*the*の過剰使用が疑われる２つの状況。

[-def, +spec] wide scope
<u>*a*(81.06)</u>, *the*(14.39), φ(3.79)

[-def, +spec] no scope interaction
<u>*a*(87.12)</u>, *the*(10.61), φ(2.27)

②*t*-検定の結果
記述統計の結果から、定性(definiteness)の有無、特定性(specificity)の有無、話者にとっての既知情報（speaker knowledge）の有無の関与が疑われた。これらの要因の有無からなる３つのペアにおいて、冠詞の正用率に差があるのかどうかを、*t*-検定を行って検討した。その結果、[specificity]がマイナスの場合に、英語冠詞の正用率が有意に低いことが、つまり誤用が多いことが判明した。

（３）結果のまとめ
データ抽出方法の異なる実験１と実験２の両方において *the* の過剰使用が認められた。また、Ionin ら(2004)が指摘するように、学習者が混同し易い指標である定性と特定性の有無が交差する状況において、誤用が起こり易いことが示唆された。しかしその一方で、彼らが問題視していない [+definite, +specific]の状況下でも誤用が多く見られた。
　今後は、多変量解析を用いて、複数の要因の相互作用を検討する必要がある。既に収集したプロトコールデータを分析した結果を加えて、総合的に考察を行う必要があると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６件）
①田中順子（印刷中）英語能力や言語適性と英語冠詞使用との関係について．国際文化学研究，*32*．査読無

②福田真里、田中順子（2009）タスクの性質と順序がL2 英語アウトプットに与える影響-冠詞に焦点をおいて-．国際文化学，*20*，15-33．　査読有

③田中順子・福田真里（2008）英語冠詞使用と英語能力と言語適性の関係について．第34回全国英語教育学会東京研究大会発表予稿集．pp. 444-445．査読無

④田中順子（2008）　第二言語としての英語冠詞の習得について-研究手法探索への一考察-．*Kobe Miscellany*，*31*，71-85．
査読無

⑤田中順子(2006) 日本語をL1とする英語学習者によるL2 英語冠詞使用について：Pear Storyを用いた探索的研究．第32回全国英語教育学会高知研究大会発表予稿集．pp. 91-92．
査読無

⑥田中順子（2006）TOEFL-ITPのスコアの関連性について：テスト結果受容者側の評価の必要性．*Kobe Miscellany*，*30*，85-100．
査読無

〔学会発表〕（計　４件）
①田中順子（2008）日本人英語学習者の英語冠詞使用：英語能力と言語適性との観点から．鳴門教育大学英語教育学会第32回大会．2008年８月６日．鳴門教育大学．

②田中順子・福田真里(2008)日本語をL1とする英語学習者の英語能力と英語冠詞使用との関係について．第 12 回関西英語教育学会(KELES)神戸研究大会．2008年５月24日．神戸大学．

③Tanaka, J.（2008）L2 English article use in oral and written narratives by L1 Japanese speakers: A study using “Pear Film.” Pacific Second Language Research Forum (PacSLRF) 2008. March 23, 2008, Beijing, China.

④福田真里・田中順子（2007）タスクモードの違いが英語の冠詞使用に与える影響：日本人英語学習者のアウトプット分析から．大学英語教育学会(JACET)関西支部秋季大会．2007年10月13日．滋賀県立大学．

〔その他〕
田中順子・森下淳也（2008）Web article test．神戸大学．（学内限定のためURLは非公開）．

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　順子（TANAKA JUNKO）
神戸大学・国際文化学研究科・准教授
研究者番号：90335406

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
該当なし